

第5章 音楽・ゲーム系列サブカルチャー教材化とその実践

第1節 歌詞を用いた授業—単元「日本のうた」の実践

1 国語科の指導計画

本章は、音楽とテレビゲームの教材化とそれを用いた授業について論述する。まず初めに、本節では音楽に関連した国語科の授業として、歌詞の教材化を提案する。わたくし自身の中学1年生を対象とした実践に即して、具体的に論述することにした。

国語科という教科の好き嫌いに関する意識調査を見ると、どの調査でも国語が「嫌い」と答える学習者の数は、常に上位を占めている。その理由の多くは、国語科の領域が曖昧で漠然としすぎていること。そして、どのように学習したらよいのか分からないということである。また解答が一つに定まらないという点を、国語嫌いの最大の理由に挙げる者もいる。中学校、高等学校ともに低学年の段階から、国語嫌いにならないように指導の在り方を工夫する必要がある。

早稲田大学系属早稲田実業学校において、わたくしの1999年度の担当は中学部1年生であった。早稲田実業学校は私立学校で、学習者は中学入学時に入学試験を受けることになる。試験に合格して入学した学習者はほぼ全員が高校に進学し、さらに多くの学習者が系列大学への推薦入学を希望する。中・高6年間、遠くは大学までを見渡した指導の在り方が問われることになる。国語科の場合、ことばの教育という原点を踏まえつつ、国語に対する興味・関心が十分に育成されるように配慮しなければならない。

学校のカリキュラムでは、「国語」は中学1年には5単位設置されている。それを便宜上「国語Ⅰ」（3単位）、「国語Ⅱ」（1単位）、「国語Ⅲ」（1単位）に分けて、それぞれ別個の担当者が担当している。「国語Ⅰ」は、教科書教材を中心とした「理解」の領域を中心に扱う。「国語Ⅱ」は自主教材を中心として、表現の領域を扱う。そして「国語Ⅲ」では書写の指導をする。各科目担当者と協議して、以上のような分担を定めた。

わたくしが担当した「国語Ⅱ」では、次のような授業方針を掲げることにした。

- ① 教科書は用いず、毎時間授業内容に即して作成した「研究の手引き」と「授業レポート」を配布し、それに即して授業を展開する。
- ② 国語科の中で、主として「表現」に関わる領域を扱う。ただし、「表現」のみを取り立てて扱うのではなく、全体として総合的な国語学習を展開する。
- ③ 身近な素材を教材化することによって、国語に対する学習者の興味・関心の喚起を最大の目標とする。
- ④ 授業時間ごとに具体的な学習目標を設定し、学習者は目標達成に向けた学習活動に取り組む。活動の結果はその都度自己評価する。
- ⑤ 「個人」「グループ」「クラス」の各段階で、効果的な活動が展開するように配慮する。
- ⑥ 授業中には「発見」と「問題意識」を尊重する。また学習の方法に対する指導を徹底し、自主的な問題解決ができるようにする。

さらに授業開きの際に、学習者には次の点を徹底することにした。

- ① 1週間に1時間の授業なので、必ず予習・復習をする。
- ② 復習は「研究の手引き」を読むこと、予習は毎時間提出する「課題」に取り組むことを、基本的な学習内容とする。
- ③ 毎回教室に「国語辞典」を持参して、授業中に随時調査する。
- ④ 授業で配布する資料は、必ず綴じてファイルストックしておく。
- ⑤ 授業中には、発表の機会を多く設定するので、積極的に発表する。指名されたら必ず返事をして立って発表する。発表の際には大きな声で発表する。
- ⑥ 定期試験のみでなく、提出物、授業態度、その他可能な限り総合的に評価する。毎回の授業時間はもちろん、予習復習を含めた日ごろの学習に真剣に取り組むように心がける。

以上のような目標および授業方針のもとで、年間の指導計画を立案した。教科書教材にこだわらず、自主的な教材を用いた言語と表現の授業を構築するべく検討した結果、1999年度は「日本のうた」という単元を中心に授業を展開することにした。この単元の目標として掲げたのは、次のような点である。

- ① 古くから歌い継がれている「日本のうた」に触れることによって、広く日本のことば、および日本の文化に対する理解を深める。
- ② うたの歌詞を通して様々なことばの学習を展開することによって、日本語に関する問題意識を持ち、教養を深める。
- ③ 辞書を活用して、自主的に学習する習慣を身につける。あわせて、国語の学習方法を身につけて、自主的な学習活動ができるようにする。
- ④ 中学から高校に至る六年間の国語学習の導入として、ことばに対する興味・関心を喚起する。
- ⑤ ことばに関する理解を踏まえてうたを歌うという活動によって、日ごろは衰退しがちな身体表現活動を促進させる。

授業方針の箇所で言及したように、学習者には毎時間「研究の手引き」「授業レポート」と称するプリントを配布することになった。「研究の手引き」には、その時間に学習する内容を整理しておく。まず「目標」をよく確認したうえで授業に入る。授業中に彼らは、課題に応じて各自「授業レポート」をまとめる。そして授業終了時には、「目標」の達成度を自己評価することにした。「授業レポート」は毎回回収して、点検してから返却する。学習者にはこのようなプリント類を、すべてファイルにストックしておくように指導する。なお、プリントはすべてA4サイズ・横書きという公文書の標準的な書式に統一した。

以下、「日本のうた」という単元で前期に実践した内容を中心に報告をして、国語学習の導入の方法について具体的に紹介することにした。勤務校は前期・後期の2期制だが、ことばの学習へのいざないという観点からすると、すでに前期の全12時間の授業において十分に扱うことができたと判断している。

2 校歌の歌詞の教材化

単元「日本のうた」の導入教材として、勤務校の校歌を選択した。入学試験に合格して

晴れて中学生になった学習者にとって、新しい学校はそれなりに魅力のある存在である。校歌は学校を象徴するものとして、新入生にとって関心のある素材となる。新しい中学校に入学した学習者に、まず校歌を覚えて謳えるようになってほしいと訴えるところから授業が始まる。

校歌の歌詞は「生徒手帳」に掲載されている。まずはその歌詞を何回か音読し、さらにノートに写す。それからいくつかの話題を提起することにした。勤務校の校歌は相馬御風の作詞だが、一番の歌詞¹は次のように「都のいぬゐ早稲田なる」という歌詞で始まる。

都のいぬゐ 早稲田なる
常磐の森のけだかさを
わが品性の姿とし
実る稲穂の帽章に
去華就実のこの校風を
高くぞ持するわが健児

まずは、「ゐ」という文字をどう読むのかという問題から出発する。授業は日本語の五十音図の話題になる。母音と子音、段と行、平仮名と片仮名等々、様々なことばの話題が展開する。音と表記との関係や、漢字と仮名関係にも言及する。続いて五十音図から「いろはうた」へと話題を展開させ、「いろはうた」を暗記するという課題も出す。

次の問題は「いぬゐ」とは何か、ということになる。そこで五行、十干、十二支について学習し、十二支を用いた古時刻、古方位の表し方に関する話題に発展する。「都のいぬゐ」は「都の北西（西北）」のことだということが明らかになる。続けて「正午」「午前」「午後」「子午線」などのことばの由来を知ることができる。さらに関連して、「還暦」や「古稀」「喜寿」「米寿」「白寿」の話、一月から十二月までの各月の古称の話など、学習者は興味を持って聞き、自分でも辞書や参考書によって自主的な調査をした。

勤務校の校歌は「常磐の森のけだかさを」と続く。「ときわ」が「とこいわ」から生じたことばであること、さらに「けだかさ（気高さ）」は「気」と「高い」からできたことばであること、「高い（たかい）」が「だかい」と濁音になる現象を「連濁」と称することなどを、ことばの話題として用意する。続く校歌の歌詞「わが品性の姿とし」では、「品（性）」ということばの意味を辞書で確認する。そして「実る稲穂の帽章に」では、「稲（いね）」の「穂（ほ）」が「いなほ」となる「転音」現象に着目する。「去華就実のこの校風を」では、勤務校の校是となっている「去華就実」について、漢文の訓読の基礎的な学習をする。一番の最後の「高くぞ持する我が健児」では、「高く持つ」という口語との比較と、「ぞ」という助詞の効果について考える。

以上のような学習を3時間の時間配当で展開し、ことばに関する様々な興味・関心を喚起することになった。授業時間内では不足する学習事項に関しては、家庭学習用の課題として学習者に自主的に取り組ませた。このように校歌の歌詞を用いて様々なことばの学習を展開した後で、改めて声に出して朗読し、さらに曲を付けて歌うことによって学習を総括する。この授業において校歌の歌詞は、まさしく国語の教材として機能している。校歌の歌詞に特に古典入門教材としての役割を付与することも可能である。教科書では説話がよく入門期の古文教材として採られているが、文語文で書かれた学校の校歌は、学習者にとって身近な古文入門の教材となり得る。

3 日本のうたの教材化（その1）

身近な校歌の歌詞を用いたことばの学習は、学習者の興味・関心を喚起するという目標に即して、有効に機能した。ことばに関する問題意識を育て、さらに問題解決の方法についての指導を徹底することによって、彼らの国語嫌いを回避することができる。

校歌の歌詞が文語文で書かれていることから、授業は「古文入門」の様相を呈することになった。古文入門の戦略を考える際に、どのような教材を発掘するかという点はきわめて重要である。わたくしは校歌を含めた「日本のうた」を、価値ある古文の教材として位置付けたいと思う。特に「童謡」や「唱歌」と称される日本のうたの中には、優れた教材価値が付加されたものが多い。

時代は大きく変容したものの、かつての日本のうたの旋律は、いまもなおどこかに残っている。例えばテレビのコマーシャルの中で、あるいはデパートのBGMの中で、ふと気が付くと懐かしいうたが流れている。学校で正式に習わないまでも、学習者がどこかで聞いたことのあるうたを教材として用いることは、国語教育の一つの戦略にほかならない。

まず初めに、多くの学習者が知っているうたを話題にする。「おわれてみたのはいつのひか」という「赤とんぼ」の歌詞、そして「いまこそわかれめ」という「あおげば尊し」の歌詞の意味を尋ねると、彼らは次のような解釈を示す。「おわれて」は「追われて」すなわち「追いかけて」、「わかれめ」は「別れ目」、すなわち「別れるとき」という解釈である。それは多数の学習者からの支持を得る。そこで授業は、果たしてその解釈でよいのかという問題提起となる。「おわれて」が「負われて」、すなわち背中におぶってもらって見るという意味であり、「赤とんぼ」の歌詞が幼少時の追憶であることを理解するとき、彼らはことばの世界の奥行きに触れる。もちろん「いまこそわかれめ」の「め」が、「目」ではなく「む」の変化したものであることを知ったときも同様である。このようにして、まず学習者のことばに対する興味を喚起することが、ことばの学習へのいざないのために最も重要な要素である。

校歌の学習に続いて、以上のような唱歌・童謡の一節に言及した後で、文庫版の『日本唱歌集』²を副読本として学習者全員に配布し、「日本のうた」という単元に入ることになった。ちょうどその授業の折々の季節にちなむうたを中心に選択して、教室で読むことにした。『日本唱歌集』を教材とした授業に入るころ、季節は四月下旬になっている。そこで最初に「茶摘み」「鯉のぼり」そして「夏は来ぬ」を選んで扱う。「茶摘み」のうたのメロディはお茶のCMソングとして普及しており、「鯉のぼり」のうたはスーパーで流れる初夏の定番ソングとなっている。いずれも学習者に馴染みのあるうたであった。

『日本唱歌集』の中で初めに本格的に取り組んだのは、「夏は来ぬ」といううたである。以下、うたの引用はすべて『日本唱歌集』の表記に基づく。

うの花のおう垣根に、
時鳥はやもきなきて、
忍音もらす 夏は来ぬ。

『日本唱歌集』に収録されたうたは、歌詞とともに曲が楽譜によって紹介されている。まずこのうたが収録されたCDを用意して、曲を聴くところから出発する。佐佐木信綱作

詞のこのうたは、ほとんどの学習者が初めて聴くうたであった。聴いた後で、声に出して何回か繰り返して読む。そのうえで、改めて歌詞に着目する。「夏は来ぬ」の「来」を「き」と読んだが、もしも「こ」と読んだらどうなるだろうか、と尋ねてみる。現代語の読み方と対応させながら、「来」の読み方によって「ぬ」ということばの意味が変わること、そして「来た」「来ない」という正反対の意味になることを理解させる。併せて、動詞の活用の問題にも自然な形で言及する。

「におう」に関しては、辞書で意味を調べて、嗅覚のみではなく視覚に対しても用いられることばであることを発見すると、学習者は意外な表情になる。さらに「垣根」ということばは、単に意味を調べるだけではなく、通学の途中で実際に「垣根」と称する現物を探すように課題を出す。自宅付近の場合、家族の人にも実際に「垣根」と呼ぶものかどうか確認を取る。このような活動を通して、彼らにとってのことばの世界が少しずつ広がってゆく。

「夏は来ぬ」には、花や鳥を初め様々なものの名前が出てくる。「うの花」や「時鳥」などは、国語辞典の意味だけでなく、百科事典や動植物図鑑で図版を見るように指導する。可能ならばスライドやテープ、さらに画像や音声の出る電子辞書やインターネットなどのメディアを授業で活用することができれば、さらに学習者の興味を深めることができるだろう。

続く2番から5番の歌詞では、主に「早乙女」「玉苗」などの美称について、「植える」と「植うる」という口語と文語の相違について、「五月闇」の「さつき」にちなんで1月から12月までの月の昔の言い方について、「蛍とびかい」から「蛍雪の功」という故事について等々、国語辞典を用いつつことばに関する学習を展開する。特にいまのことばと昔のことばの相違には十分に注意して、どこがどのように異なるのかを具体的に確認することにした。

一通り学習が終了すると、必ず曲を付けて歌うことにした。教師がハーモニカやオカリナもしくはギターなど、手軽に教室に持ち込める楽器を用意して、簡単な伴奏をする。上手に歌う必要はない。ことばの意味を学習して、そのうたの世界をある程度理解したうえで、うたの雰囲気をとらえながら心を込めて歌うように促す。最初に曲を聴き、歌詞を音読し、最後には声に出して歌う。この身体表現活動もまた重要なことばの学習である。

倉澤栄吉は「愛語」と題する講演³の中で、次のように述べている。

「夏は来ぬ」では、「来ぬ」が「来ない」と「来た」では大きく意味が違うのはご存じのとおりですが、このような助動詞の働きの違いだけでなく、当時の言葉（文語）の意味に深く向き合うことで生活の様子や、人々の考え方に迫ることができます。現代の人々は、口語体の文章の中で生きていますが、口語のなかにも文語はたくさん入り込んで意味形成に関わっています。だから、「童謡・唱歌」をとおして、自然に子どもたちの幹事や文語の学びに導かれていくことは、自分たちの言葉を見直すことになり、新たな学びの可能性が開かれるのです。⁴

本節で紹介する歌詞を用いた授業は、この倉澤の指摘に関連する。実践を通して、まさに「新たな学びの可能性が開かれる」ことを期したい。

4 日本のうたの教材化（その2）

「夏は来ぬ」に続いて、『日本唱歌集』から文部省唱歌の「故郷」を学習することにした。これ以後、1時間につき一つの曲を扱うというペースで授業を展開した。このうたは有名でほとんどの学習者が曲を知っていたため、曲を付けて歌うところから始めた。

兔追いしかの山、
小鮒釣りしかの川、
夢はいまもめぐりて、
忘れがたき故郷。

授業では、「兔追いし」「小鮒釣りし」の「し」の意味について、「かの山」「かの川」の「かの」について、「忘れがたき」の「かたい」ということばの意味について等々、ことばの学習を展開する。同様に2番と3番を学習してから、発展的な課題を出す。具体的には、「故郷」のことを歌ったうたは「故郷」のほかに『日本唱歌集』にはどんなうたがあるか探してみよう、という課題である。「故郷の空」「故郷の廃屋」「旅愁」その他、「故郷」ということばが挿入されたうたを探すことはさほど難しくはない。それに対して最近のうたの中には、昔ほど「故郷」のことが出て来ないことの原因についていろいろと想像させた。学習者の多くは、交通機関や情報機器の発達によって都会と故郷との実質的な距離が狭まったことを理由として挙げた。

授業では、続けて林古溪作詞の「浜辺の歌」を学習する。

あした浜辺を さまよえば、
昔のことぞ しのぼるる。
風の音よ、雲のさまよ、
よする波も かいの色も。

一番の歌詞の中では、以下のような学習事項を扱った。「あした」のことばの意味について、「明日」のほかに「朝」の意味があることについて、「昔のことぞ」の「ぞ」の意味について、「よする」と「よせる」をめぐって昔のことばといまのことばの相違について、「もとおる」のことばの意味について、「星のかげ」の「かげ」のことばの意味について。さらに、「れる」と「られる」に着目した。いま話題になっている「ら抜きことば」という現象についても、ここで言及する。学習者に参考書として配布している国語便覧を参照して、「れる」と「られる」の使い分けについて個々に調査させた。

「浜辺の歌」に続けて、前期最後の教材として、文部省唱歌の「海」を取り上げた。

松原遠く消ゆるところ
白帆の影は浮ぶ。
干網浜に高くして、
鷗は低く波に飛ぶ。
見よ昼の海。
見よ昼の海。

授業を通して、学習者に辞書を引く習慣を付けるように配慮してきた。さらに1週間に1時間の授業ということで、必ず毎回予習と復習を実施するように指導した。「研究の手引き」には毎回「課題」を示して、次の授業時間までに学習するように徹底した。

授業ではことばの意味に関して、辞書で調査した結果を発表させ、教室で確認する。さ

らに、文語と口語の相違について、歌詞の中の対照的な表現について、それぞれ学習する。うたの意味が理解できたところで、情景を想像しながら曲を付けて歌う。このような指導過程によって、単元「日本のうた」の前期の学習は終了した。

5 聞き書きへの展開

以上のような過程で前期の授業を展開したが、前期の学習の総括として、聞き書きを夏休み期間に実施させることにした。聞き書きのテーマは「日本のうたとの出会い」とし、前期の授業で学習した「日本のうた」について、身近な人の話を聞いて、それをまとめることを中心とした課題である。

話を聞く人については、両親、祖父母など、「人生の先輩」に当たる人とする。もちろん「恩師」など血縁関係がない人でも可とする。ただし同世代の「友人」、および年齢の近い「兄弟」や「先輩」は避けて、夏休み期間に話を聞くことができる人に限ることにした。

話を聞く相手の人が決定したら、次にどのようなことを聞くのかを検討することになる。具体的には次のようなことを聞くように指導した。

- ① 子どものころ聴いた「日本のうた」を覚えているか。それらのうたの中で、自分の人生にとって何らかの意味のあるうた、大人になってからも忘れられないうた、いまも特によく覚えているうたがあったか。
- ② それはどのようなうただったのか。そのうたを聴いたときの状況はどうだったか。自分自身の当時の状況とうたの内容とはどのように関連するか。
- ③ そのうたのテープやCD、レコードなどを持っているか。それをテープにダビングさせてもらうことはできるか。

話を聞きながら、必ずその内容をメモしておくこと、および特に固有名詞などは間違いないように正しく聞いて書いておくように注意する。特に重要なことは、聞き書きにおける「聞く」という活動は、決して一方的に相手からのメッセージを受け取るという受動的な行為ではなく、相手の話を積極的に引き出すという能動的な行為として位置付ける必要がある。

聞いた内容に関しては、次のような形で整理するように指導した。まとめる際の参考に資するように配慮して、それぞれ具体例を紹介した。

- ① 内容にふさわしい題名をつける。《例》「GSと母の青春と」
- ② 誰から話を聞いたのかを紹介する。《例》『国語Ⅱ』で聞き書きの課題が出されたので、私は母親から話を聞くことにした。母は今もうたが好きで、中学生のころからよく聞いていたと言っていたから、この機会にいろいろと聞いてみようと思った。」
- ③ 話を聞いたときの様子を紹介する。《例》「母は少しはずかしそうにしながら、話し始めた。でも話しているうちに、しだいに 話に夢中になっていった。」
- ④ 聞いた話の内容を、話し手のことばを生かしながらそのまままとめる。《例》「母さんの中学生のころは、GSが流行していたな。『GS』って知らないでしょう。『グループ・サウンズ』を略したものなのよ。」
- ⑤ 相手が紹介した「日本のうた」のことを具体的にまとめる。《例》「それは『ブルー・シャトー』といううたで、歌詞は『森と泉に囲まれて……』で始まる。」

⑥ 話を聞いて、感じたこと・考えたことをまとめる。《例》「母の話を聞いて、母の青春時代のことや当時の社会の様子がよく分かった。母にそんな青春があったのかと、意外でもあった。」

聞き書きはA4サイズの横書き原稿用紙（400字詰め）5枚程度にまとめて、必ず綴じて表紙を付け、表紙には、組・番号・氏名を記入させる。また話の中で紹介されたうたをダビングした場合は、そのテープも提出させることにした。

かくて夏休みが終了し、後期の第1時間目の授業時に、学習者はそれぞれが取り組んだ聞き書き作品とテープを持参した。話を聞いた相手の人は、中学1年生全体で次のような比率であった。なお、カッコ内の数字はパーセントを表す。

- ① 母親 （56）
- ② 父親 （23）
- ③ 祖父母 （19）
- ④ その他 （2）

特に母親から聞いたという学習者が全体の半数以上に及び、男子の学習者にとって最も身近な話し相手であることが分かる。したがって、聞き書きの中で紹介された日本のうたの多くは、両親の世代の青少年時代に流行した曲であった。複数の人から紹介されたうたは、「心の旅」「上を向いて歩こう」「戦争を知らない子供たち」などである。また祖父母から聞いたうたの中には、時代を反映して軍歌や寮歌も含まれていた。

聞き書きの意義は、一つに総合的な学習活動の成立が挙げられる。聞く活動と書く活動の総合という国語科の領域に関わるものだけではない。たとえば祖父母から聞き書きをした学習者の感想には、次のようなものがあった。

祖父にうたの背景について尋ねたが、その時代の背景や戦争についての話が聞けて有意義だった。

この感想からも伺えるように、聞き書きを通して戦時中や戦後の社会状況を、直接体験した人から聞くことは、何よりも生きた社会科の学習活動である。

さらに、話し手と聞き手との間にコミュニケーションが生まれることも聞き書きの重要な意義として指摘できるだろう。ある学習者の感想の中に次のようなものがあった。

ふだん、父と話す機会が少なかったけれど、聞き書きの課題を通して、親子のコミュニケーションがうまくとれてよかった。

学習者が取り組んだ聞き書きは、授業時間中に少人数のグループで回覧し、相互評価を実施のうえ、コメントを相互に記入させた。その後、担当者に提出させることにした。

折しも文化祭の季節を迎え、中学1年生はすべてのクラスが文化祭に参加し、その他に授業で取り組んだ作品その他を学年でまとめて展示するという企画があった。わたくしは聞き書きの作品を文化祭で展示する方向で、準備に当たり、予定通り文化祭を利用して広く公開し、保護者にも読んだり聴いたりしてもらった。原則として、提出された全員のものを展示することにしたが、特にプライバシーの問題に関しては細心の注意を払った。文化祭当日には、多くの生徒保護者および受験生とその保護者の方が、中学1年の学年展示を見学に訪れた。会場に用意したノートから、文化祭に来場した学習者と受験生の保護者の感想を引用する。

日本のうたの宿題のおかげで、祖父と向き合って貴重な時を過ごす子供を見て、感謝

の気持ちで一杯でした。(生徒保護者)

皆さんのお父様お母様と同年代なので、私と同じ気持ちで聴いていた歌の数々になつかしく思い出されました。私が昔聴いた歌を中2の息子も今、気に入って聴いています。(受験生保護者)

「国語Ⅱ」の学習の成果を、文化祭という場所を用いて公表する機会に恵まれたことは、一つの収穫であった。授業と関連した発表会を、文化祭のような学校行事の中に取り入れることも、今後積極的に検討する必要がある。

6 歌詞の教材化を求めて

以上のような方法によって、前勤務校における1999年度「国語Ⅱ」の前期授業を展開した。後期の授業では、参考文献に読売新聞文化部編『唱歌・童謡ものがたり』(岩波書店、1999. 8)を用いて、『日本唱歌集』に収録されたうたの背景に相当することも紹介した。さらに、佐藤良明の『J-POP進化論』(平凡社、1999. 5)に即して、現代の日本のうたの問題にも言及して、さらに学習の領域を広げることができる。「日本のうた」という単元を、スケールの大きなものに育てたいと考えている。

言うまでもなく、中学1年生は中等教育の出発点に位置する大切な学年である。この段階で国語嫌いにしてしまったら、その後の国語学習からも遠ざけてしまうことになりかねない。ことばに対する興味・関心を十分に喚起しつつも、国語学習に慣れるという配慮が必要になる。

「国語Ⅱ」の授業における評価は、可能な限り総合的なものを目指した。すなわち、学習者が毎時間提出する「授業レポート」の内容、授業中の発表、授業に参加する姿勢、提出物の内容、そして定期試験の結果等をきめ細かく勘案して、個々の学習者を評価するという目標を立てた。なおこの考え方の基盤として、国語学習に対する興味・関心を、中学一年の段階できわめて重要な学力としてとらえたということがある。

本節では、「日本のうた」という単元の実際に関して、「ことばの学習へのいざない」という観点から整理したものである。なおここで紹介した実践は、高等学校の古典入門期の授業にも応用することができる。さらにこの「日本のうた」の学習は、2007年度現在用いられている学習指導要領の「総合的な学習の時間」にも応用可能な内容である。今後さらに工夫を重ねて、効果的な国語学習へのいざないを続けたいと思う。

注

- 1 本節で引用する日本のうたの歌詞は、すべて一番のみとする。
- 2 堀内敬三・井上武士編『日本唱歌集』(岩波書店、1958. 12)。
- 3 日本国語教育学会第32回西日本大会・熊本大会における講演。
- 4 『月刊国語教育研究』(2007. 10)に収録された「講演要旨」による。